

あなたの重荷を主に委ねよ

頭書にはダビデの詩とあるが、この詩の背景としてダビデを想定すれば、息子アブサロムのクー・デターとダビデの政治顧問・軍師として活躍したアヒトペルの離反が考えられる。しかし、現在の歴史的・批判的註解では、詩編はかなり発達したエルサレム神殿での祭儀的礼拝を想定しているのだから、ダビデ時代より新しいものであるとされている。そこで、ダビデ自身の歴史的な文脈を念頭におきながら、それに拘らないスタンスで読むことにしよう。「わたし」あるいは「わたしの祈り」など第一人称単数形で語られる「救いを求める祈り」の一つであり、この詩の特徴を言えば、親しい友の裏切りと「あなたの重荷を主にゆだねよ」(I ペトロ 5 : 7) という勧告であろうか。

敵からの救いを求める祈り (2-3 節、10 節、16 節) を中心にして、敵意によって傷つく詩人の苦悩 (うろたえ、不安、もだえ、死の恐怖、恐れとわななき、戦慄等豊富な語彙で表現)、神への呻きと聞き届けの約束にしがみつく姿勢、そして、突然現れる「あなたの重荷を主にゆだねよ」という他者への勧告 (自問自答のようにも響くが) が付加されている。嘆き、苦しみ、悲しみを主なる神に向けて叫ぶことができることは、具体的問題解決にも勝って慰めである。

1. 神に向かって嘆く

祈りに「耳を向けてください」、「耳を傾け、答えて下さい」、そして、嘆き求める信仰者から「神が身を隠すことがないように」と願う。先に指摘したように、詩人はありのままの自分を神の前に披歴する。「うろたえ」(訴える中で休みがない)、「不安」、「もだえ」、「死の恐怖」、「恐れとわななき」、「戦慄」等豊富な語彙で嘆きの深みを表現している。私自身、このような深い嘆きを経験しているかどうか逆に問われる程深刻な嘆きである。敵対者が見えていないのか、敵対するほど自分の信仰で闘っていないのかどうか問われる。

2. 主は救ってくださる

17-19 節では、「わたしは神を呼ぶ」、「悩んで呻く」に対して、主が「わたしを救ってくださる」(Qal) 「神はわたしの声を聞いてくださる」「わたしの魂を贖い出し (Qal Perf.)、平和に守ってくださる (Qal Perf.) 「神はわたしの声を聞き」、敵対する者を「低くされる」という神の応答に言及する。ヘブライ語の動詞の性質上、願望とも理解できるが。…20 節 21 節は原文が不鮮明であり、翻訳が難しい。「いにしえからいます神は聞き、(敵対する) 彼らを低め給う。なぜなら彼らは (悔い改めて) 変わることをせず、神を恐れないからである。私の仲間は一人の友に手を下し、私との契約に違反した。」

3. 敵対者の滅びを願う

自らは無力であり、「もし翼があれば荒野に飛んで身を隠すことができるのに」と思う。何が、誰が敵対者であるのかにもよるが、神を信じる者の荒野の隠遁生活の実践が、エジプトなどを中心にキリスト教信仰の中にも息づいてきた。現在でも「退修会」(retreat) という用語があるが、身を退かせることも大切であろう。無力であるゆえに、神の介入による滅びあるいは敵の自滅を願う。10 節、16 節、

24 節。

4. エルサレムの街中での不正

農耕や田舎の生活が美化されているわけではないが、都市での「分裂」を誘う悪だくみ、「不法と争い」「搾取と詐欺」が横行し、都の城壁の上を巡り、闇の世界、滅びへの誘いの力が働いていることを指摘している。それらは、具体的、実際的には個々の人間の業ではあるが、集合的に、伝染的影響として、エフェソ 6：11-12 にあるように、「悪魔の策略、血肉を相手にするものではなく、支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするようなもの」なのかも知れない。

5. 友の裏切り

詩人の嘆きは、単なる敵対者に対する嘆きだけでなく、アブサロムであれば自分の息子であり、アピトペルであれば、契約を結び、信頼して軍師として重用していたものであり、昨日までの「友」の離反であることを告白する。極近い者の離反は身にこたえる。13 節 - 15 節。「だが、それはお前なのだ。わたしと同じ人間、わたしの友、知り合った仲、楽しく、親しく交わり、神殿の群衆の中を共に行き来したものだ」。21-22 節も契約を結んだ仲間の離反を嘆く。原文は単数形「彼は」である。イエスを裏切ったユダを思い起こす。イエスとパン切れを共に浸して食べたユダがイエスを裏切ったのである（ヨハネ 13:26）。マタイ 26:50「友よ、なんのためにきたのか」。

6. あなたの重荷を主にゆだねよ

第一人称の詩に突然、他者への勧告が現れる。自分自身に語っているかのようでもある！「我が魂よ！あなたの重荷を主に委ねよ」。(具体的解決でないとしても、そのような祈りの応答ではないにしても、信仰者は重荷を主に委ねることが (Cast your burden on Yahweh) できる。私はキリスト者となって今まで聞いたことのない言葉が聞けた、それは「委ねる」という言葉である。むしろ、英語の surrender はポップミュージックなどにも登場するが…。ホーリネス教団、インマヌエル教団の指導者との対話：私「委ねるということはどういうことですか？」応え：「ただ委ねなさい！」私「はあ?!」委ねられないわたしを委ねよう！

7. わたしはあなたに依り頼みます

詩は、欺く者への神の審判の願いで終わっているようにも見えるが（優れた軍師アピトペルは、都落ちしたダビデを夜の内に追い、殺すべきことを進言するが、聞き入れられず、やがて来る敗北を予見して、自死した。サムエル下 17:1-23)。救いを求め、嘆く祈りにおいて「わたしはあなたに依り頼みます」(but I will trust in You) が最後の言葉である。